

学びのニューノーマルを デザインする

遠隔・ハイブリッド教育の戦略的導入と実践



なぜ今、教育の変革が不可欠なのか？

社会の急激な変化（DX化、グローバル化）は、教育が育成すべき人材像そのものを変えました。これは、コロナ禍以前から始まっていた大きな潮流です。

「子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」

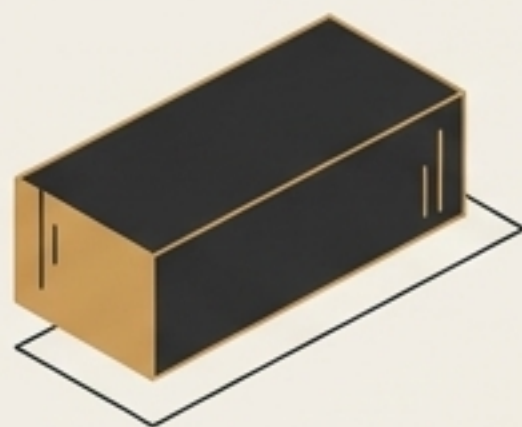
—— キャシー・デビッドソン（ニューヨーク市立大学大学院センター教授）

これからの社会で求められるのは、未知の課題に対応できる「資質・能力」です。学習指導要領も、問題発見・解決を念頭においた「深い学び」、他者との協働による「対話的な学び」、そして自律的な「主体的な学び」を重視する方向へ改訂されました。

コロナ禍が暴いた現実と、教育の新たな役割

COVID-19は、遠隔教育を「非日常のイベント」から「学びを止めないための必須機能」へと位置づけを根本的に変えました。

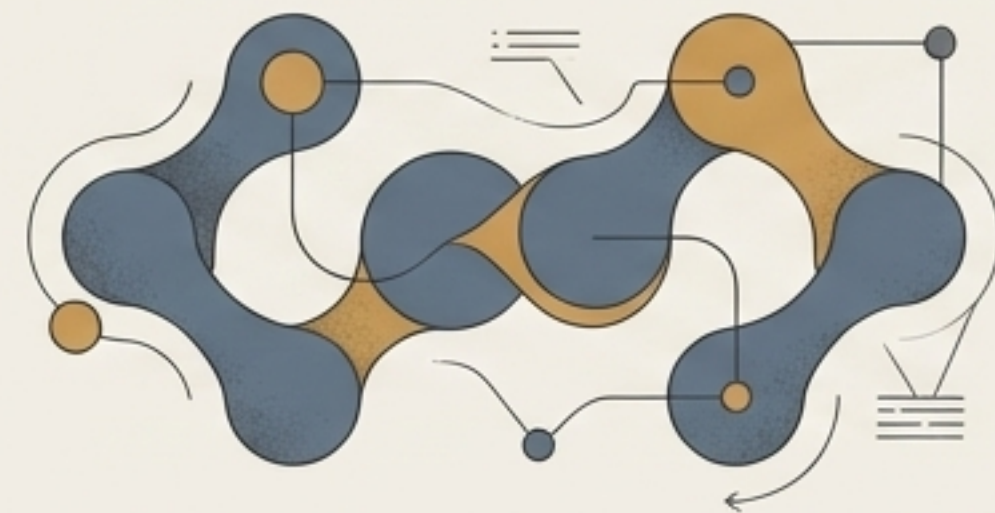
BEFORE コロナ



位置づけ：イベント的な非日常の学び
目的：通常授業ではできない特別な体験



AFTER コロナ



位置づけ：日常の学びそのもの
目的：「いつでも、どこでも、誰とでも」学べる環境の保障



GIGAスクール構想によるICT環境整備が、この変革の「追い風」となっています。

可能性を拓いてきた制度の変遷：大学設置基準の緩和

1997年



遠隔授業による単位修得を初めて認可。
卒業要件124単位中、上限**30単位**まで。

1998年



上限が**60単位**に拡大。

2001年



大きな転換点

要件を「同時かつ双方向」から緩和。
e-Learningなど非同期型でも、設問解答や
意見交換の機会が確保されていれば可能に。

2015年



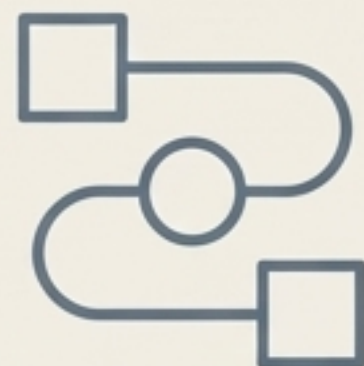
全日制・定時制高校でも遠隔授業が可能に。
総単位数74単位中、上限**36単位**まで。

現代の教育ツールキット：ハイブリッド型授業の3つの基本パターン



ハイフレックス型 (HyFlex Model)

コンセプト：学生が「対面」か「同時オンライン」かを各回で選択できる。教員は対面で授業を行いつつ、同時に配信する。



ブレンド型 (Blended Model)

コンセプト：授業の目的や内容に応じて、教員が「対面回」と「オンライン回」を意図的に設計・組み合わせる。「反転授業」もこの一種。



分散型 (Distributed Model)

コンセプト：受講生をグループ分けし、半数が対面、残りがオンラインで受講。次回は入れ替える。教室の人数制限下で対面授業を実施するための手法。

各パターンの戦略的評価：メリットとデメリット

パターン	メリット	デメリット
ハイフレックス型 (HyFlex)	• 学生が状況に応じて最適な受講形態を選択可能 • フルオンラインへの移行が容易	• 教室の機材設定が複雑 • 対面とオンライン両方への配慮が必要で、教員の負荷が高い
ブレンド型 (Blended)	• 各回の目的に最適な方法を選ぶため、教育効果が高い • 対面とオンラインの反応を見ながら授業を進められる	• 全員参加の対面回には広い教室の確保が必要 • オンラインのみの学生には完全な代替が困難
分散型 (Distributed)	• 人数制限がある中でも、授業回数を増やさず対面を実施可能	• 対面・オンライン両方の準備が必要で、教員の負荷が極めて高い • コースデザインが複雑になる

テクノロジーが可能にする新たな学びの地平：遠隔協働学習

「コンピュータ通信などを利用して、学校間あるいは学級間で情報交換をしながら、
共同で学習活動を進めていく形態」

視点の多様化 (Diversification of Perspectives)

他地域の学生や専門家と繋がることで、教室の中だけでは得られない多様な意見や文化に触れることができる。

内省と「わかりなおし」 (Reflection and "Re-understanding")

自分たちの知識や文化を外部に説明しようとすることで、自分たちの理解を客観視し、深化させる「わかりなおし」が起こる。

協働

学習意欲の向上 (Increased Motivation)

「他者」に伝えるという目的意識が、学習への強い動機づけとなる。

シナジー効果 (Synergy Effect)

異なる地域の現職教員が持つ「経験知」を交流させることで、互いの教育力を高める。

成功の礎となる設計思想：インストラクショナルデザイン

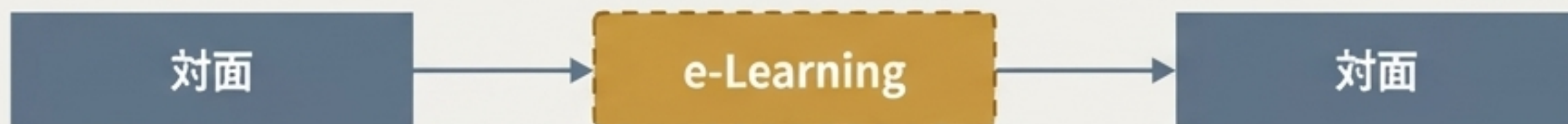
効果的な授業は、偶然生まれるものではありません。「何を教えるか（カリキュラム）」を、最も効果的・効率的・魅力的に実現するための方法論がインストラクショナルデザインです。

目的は「教えること」ではなく、
学習者が「**自ら学ぶ**」ことを
手助けし、行動変容を促すこと。



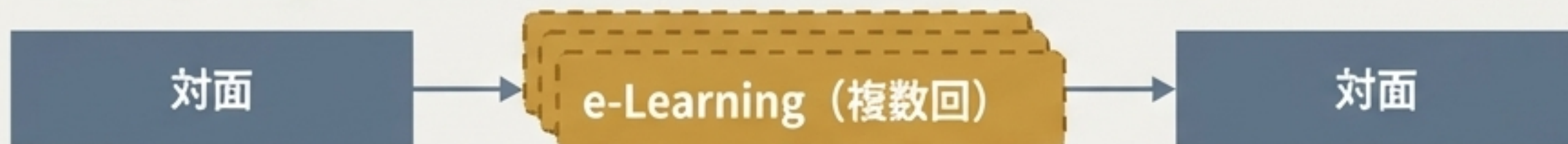
インストラクショナルデザインに基づく具体的な授業モデル

モデルⅠ型: 理論と実践の往復



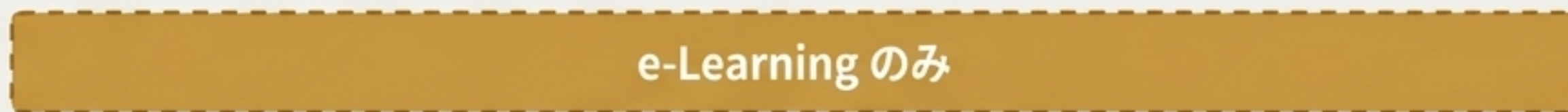
Use Case: e-Learningで理論を学び、対面でグループ討議やワークショップを行う。問題解決能力の育成に最適。

モデルⅡ型: 基礎固めと応用



Use Case: 最初の対面で目標を明確化し、e-Learningで知識を定着させる。自分のペースで繰り返し学習可能。

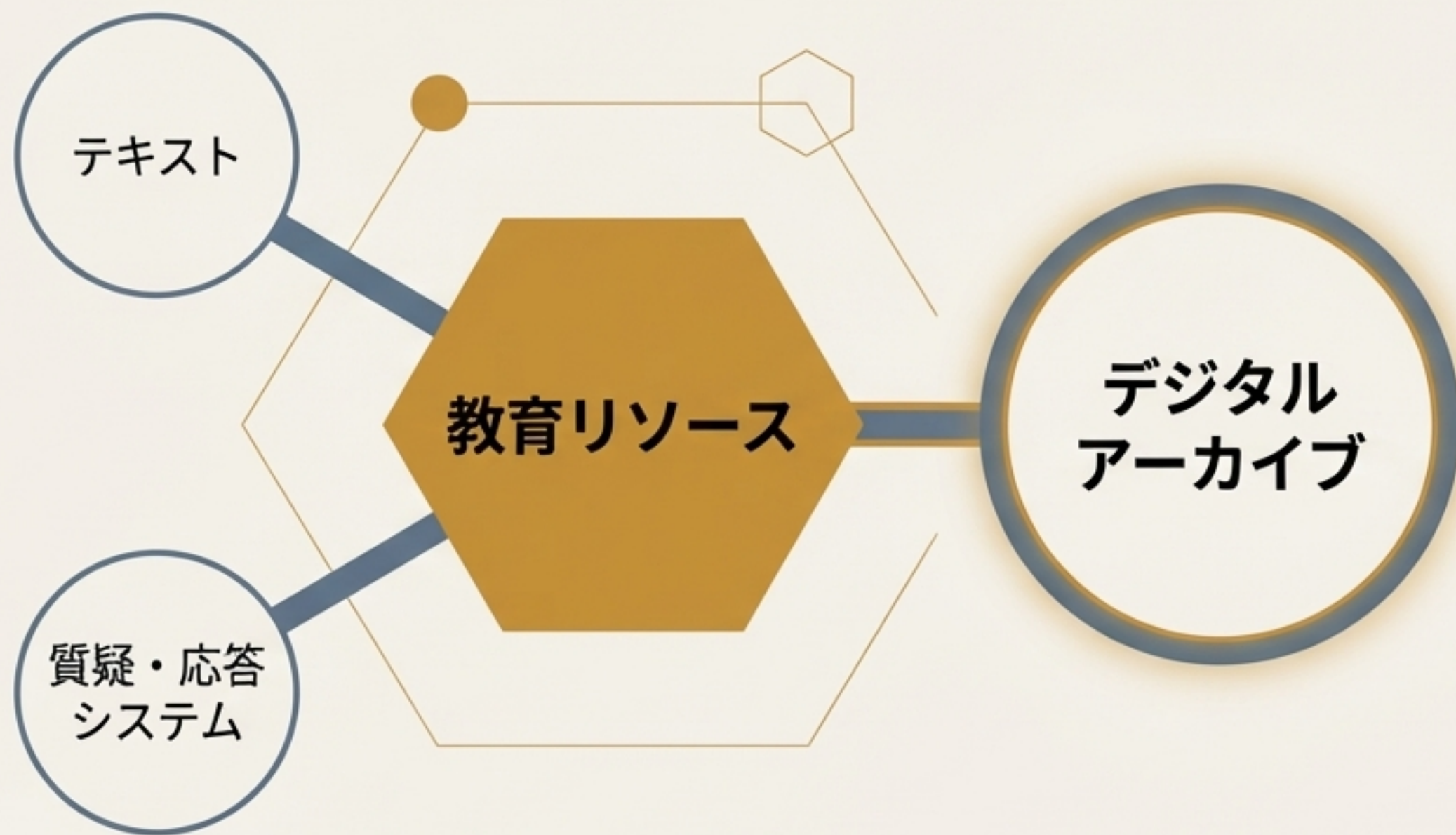
モデルⅢ型: 自律的・継続的な学び



Use Case: いつでもどこでも学べる完成型。生涯学習社会における、学び続ける学習者のためのモデル。

ハイブリッド型授業を駆動させるエンジン：教育リソース

ハイブリッド型授業の効果は、教育リソースの質とアクセス性によって大きく左右されます。特に、体系化されたデジタルアーカイブは不可欠です。



Function of the Digital Archive:

- 学習を深化させるための仕掛け
- 個別最適化された教材の提供
- 「自ら知識を構成する」構成主義的な学びを支援

遠隔教育がもたらす学習効果と新たな可能性



学習者にとっての効果

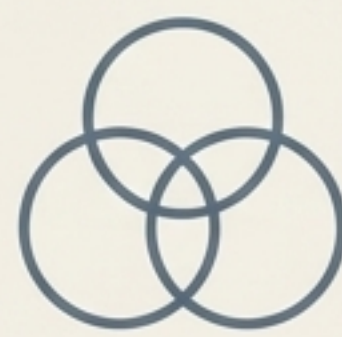
高い集中力 (Increased Focus) :
外部環境から妨げられず、講義に集中しやすい。

心理的安全性 (Psychological Safety) :「対面で顔を合わさない」ことで、恥ずかしさや照れがなくなり、積極的に発言・質問しやすくなる。



教員にとっての利点

教材の高度化 (Enhanced Teaching Materials) :
多地点・多数の受講者に対応するため、講義内容をより充実させ、映像などを含むマルチメディア教材を準備する動機になる。



組織・コミュニティにとっての価値

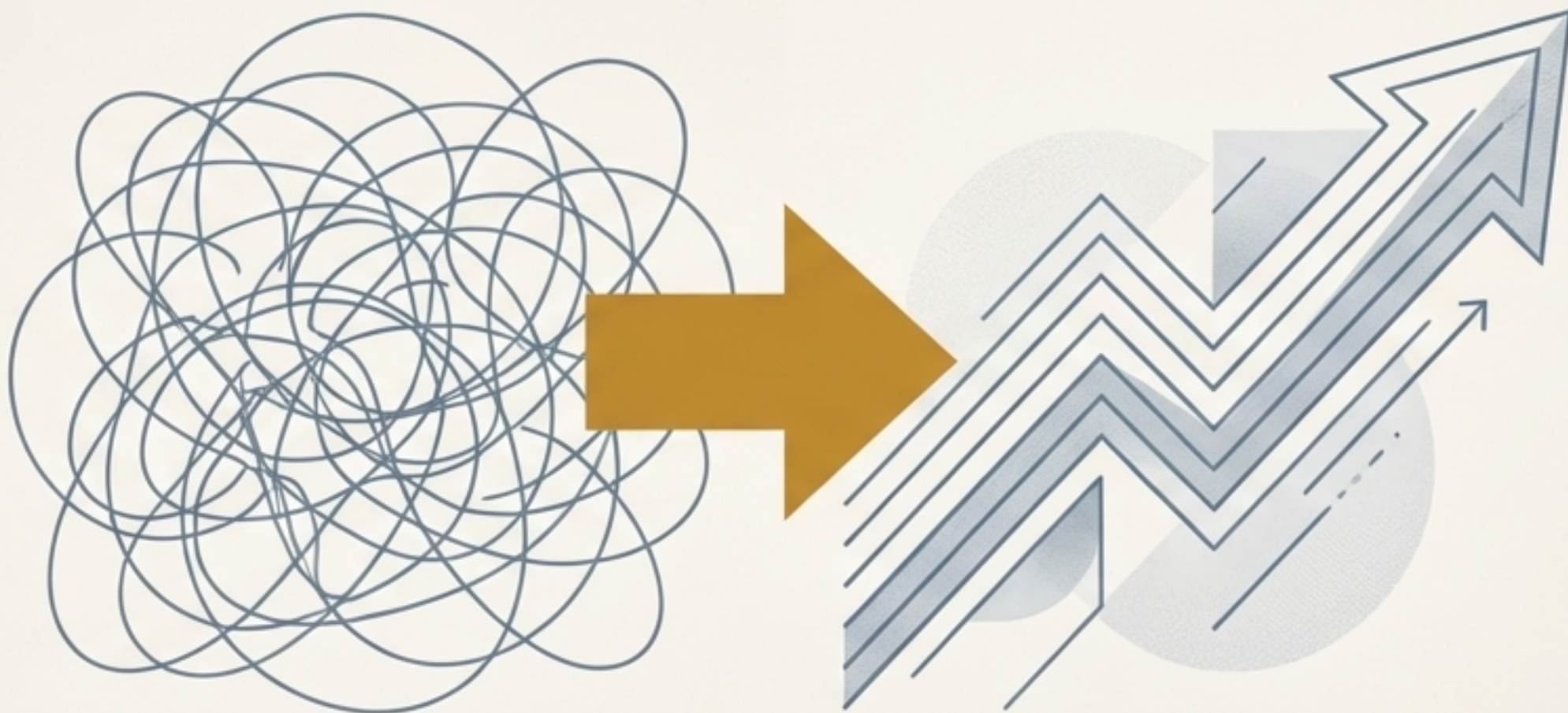
シナジー効果 (Synergy Effect) :
異分野・異地域の学習者が交流することで、それぞれの「経験知」が組み合わせられ、新たな知見や教育力の向上が生まれる。

緊急対応から、未来を創る「新たな強み」へ

PAST (緊急対応 - Emergency Response)

FUTURE (戦略的優位性 - Strategic Advantage)

- "With Corona"の守りの一手
- 目的：学びを止めないこと



- "After Corona"の攻めの一手
- 目的：学びの質と機会を最大化すること

私たちのゴールは、コロナ以前の教育に「戻す」ことではありません。今回の経験を糧に、テクノロジーを戦略的に活用し、より柔軟で、より質の高い教育モデルを構築することです。

私たちが目指す未来：生涯学習社会の実現

The Vision:

年齢や場所の制約を超え、誰もが学び続けられる社会へ。

Our Commitment:

- 高校卒業生から社会人まで、幅広い学習者を対象とする。
- 本学が培ってきた「遠隔教育の実績」と「膨大な教育リソース（デジタルアーカイブ）」を最大限に活用する。
- 学習者が生活の場を離れることなく、「いつでも、どこからでも、誰とでも」専門的かつ実践的な力を養える機会を提供する。



未来の学びをデザインするための3つの要諦



1

意図的な設計が鍵

優れたハイブリッド教育は、テクノロジーの導入だけでは実現しない。インストラクショナルデザインに基づき、学習目標から逆算した戦略的な設計が不可欠である。



2

デジタルリソースがエンジン

個別最適化され、探究を促す学習体験の核となるのは、質の高い教育リソースのデジタルアーカイブである。これは単なる教材置き場ではなく、学びを駆動させる戦略的資産である。



3

「協働」が学びを深化させる

コンテンツ伝達型の授業を超え、遠隔協働学習を取り入れることで、学習者は多様な視点に触れ、自らの学びを客観視し、真に深い理解に至る。